

書 評

Ian N. Wood, *The Missionary Life: Saints and the Evangelisation of Europe 400-1050*.

Harlow: Pearson Education Limited 2001,

xiii + 309 p.

イアン・N・ウッド

『宣教伝。聖人とヨーロッパのキリスト教化、400年から1050年』

小 澤 実

1. 宣教史という研究分野

従来、宣教史 (History of mission) は教会史の一枝をなしてきた¹。言うまでもなく、20世紀の教会史記述の大立者であったアドルフ・フォン・ハルナックによる『最初の3世紀におけるキリスト教の宣教と拡大』(1902)を嚆矢とし²、未完の叢書「宣教史としての歴史」に結実する潮流である³。この流れに浮かび上がるのは、教会を中心とした教会組織が、異邦人に福音を宣べ伝え、その教会法空間を拡大するというキリスト教化プロセスの一側面としての宣教である。とりわけ中世に限って言えば、

¹ 本稿では mission の訳語としてカトリック用語の「宣教」をあてる。プロテスタントではしばしば「伝道」とするが、本稿では両訳語の間に横たわる両宗派の神学理念上の相違は特に考慮しない。評者は信仰を持つ者ではないので、いずれの立場に立つものでもない。書評対象書では中世という時代が論じられているがゆえに、カトリック用語を選択したにすぎない。

² Adolf von Harnack, *Die Mission und Ausbreitung der Christentums in den ersten drei Jahrhunderten*. 2 vols. 4 Aufl. Leipzig 1924 (1 Aufl. 1902).

³ K. Schäferdiek hrsg. *Die Kirche des früheren Mittelalters* (Kirchengeschichte als Missionsgeschichte 2-1). München 1978.

ドイツ語圏において汗牛充棟のごとき研究が積み重ねられてきた。それは関連史料の徹底的精査というドイツ系学者にしばしば見られる学術的習性もあるが、聖ボニファティウスによる宣教活動、カール大帝によるザクセン平定、オットー朝期のポーランドやデンマークの改宗、ドイツ騎士修道会によるバルト海沿岸部の改宗といった、ヨーロッパ半島における宣教の歴史において重要な事例が、いずれもドイツ帝国と関りが深いことにある。

ここで以上のような研究履歴の全容をふり返る準備は評者にはないが、これまでのドイツ史学の宣教研究で重要だと思える論点を2つ挙げておきたい。1つは、神学知と宣教の関係である。宣教とは、ただ宣教者個人の宗教的意志に基づくものではなく、グレゴリウス大教皇以来の教皇庁そして大司教座といった教会ヒエラルキーの最上層による、異教圏のキリスト教化プログラムの一面である⁴。したがってそのプログラムの背後には高度に専門化された神学知が存在し、その解明には典礼研究と神学研究の成果が必要とされる。たとえば、K・D・カールのように、宣教活動とアウグスティヌス以来の神学知の併走を指摘した研究はその代表例でもあろう⁵。もう1つは、世俗支配者と宣教の関係である。このような研究の嚆矢として——そして時代背景を反映したその政治性も含めて——しばしば指摘されるのはアルベルト・ブラックマンが『歴史学雑誌』に掲載した論考であるが⁶、その後も、とりわけ王権による政策とし

⁴ たとえば、W. Fritze, “*Universalis gentium confessio*. Formeln, Träger und Wege universalmissionarischen Denkens im 7. Jahrhundert.” *Frühmittelalterliche Studien* 3 (1969), S. 78-130; R. Markus, “Gregory the Great and the origins of a papal missionary strategy.” *Studies in Church History* 3 (1966), pp. 29-38; R. E. Sullivan, “The papacy and missionary activity in the early middle ages.” *Mediaeval Studies* 17 (1955), pp. 46-106.

⁵ K.-D. Kahl, “*Compellere intrare*. Die Wendenpolitik Bruns von Querfurt im Lichte hochmittelalterlichen Missions- und Völkerrechts.” *Zeitschrift für Ostforschung* 4 (1955), S. 161-193 & 360-401.

⁶ A. Brackmann, “Die Ostpolitik Ottos des Grossen.” *Historische Zeitschrift* 134 (1926), S. 242-56. 彼の政治性に関しては、P・シェットラー(木谷勤・小野清美・芝健介訳)『ナチズムと歴史家たち』(名古屋大学出版会 2001年) 61-62頁。さらに広い観点から、千葉敏之「閉じられた辺境

ての新設司教座という観点から、H・ボイマン、K・ヨルダン、F・ロッター、J・ペーターゾーンらが、地域史的特性を盛り込んだ重要なモノグラフを生み出した⁷。以上2つの伝統的論点を加味し、初期中世における宣教史——そして政治史——に新境地を開いたのが、アルノルト・アングェネントであったことは改めて指摘するまでもないだろう⁸。なお、このアングェネントの成果を吸収した千葉敏之の近年の論考は、日本語で初期中世の宣教の問題を扱ったほぼ唯一の作品として参照に値する⁹。

以上ではドイツにおける宣教研究に注目したが、近年、従来の教会史とは別のコンテキストで宣教史に対する注目が集まっている。もちろん上述した一連の研究もまた、ドイツにおける歴史学の進展を反映してのものであることは言うまでもないが、とりわけ英語圏における初期中世研究の進展は、2冊の記念碑的な通史を生み出した。ピーター・ブラウンの『西方キリスト教世界の勃興』（1996）とリチャード・フレッチャーの『蛮族の改宗』（1997）である¹⁰。古代末期研究の隆盛の立役者であるブラウンの著作は、古代末期から紀元千年に至るまでのキリスト教化のプロセスを論じ、他方で中世スペイン研究者であるフレッチャーの著作は、異教からキリスト教への転換という観点から、おおよそ12世紀のバルト海十字軍の時代までを叙述している。いずれも、それぞれの専門に

中世東方植民史研究の歴史と現在」『現代史研究』49（2003）1-23頁。

⁷ 東方改宗に関する古典的研究は、次の論文集に再録されている。Helmut Beumann hrsg. *Heidenmission und Kreuzzugsgedanke in der deutschen Ostpolitik des Mittelalters*. Darmstadt 1963.

⁸ Arnold Angenendt, *Kaiserherrschaft und Königstaufe. Kaiser, Könige und Päpste als geistliche Patrone in der abendländischen Missionsgeschichte*. Berlin - New York 1984.

⁹ 千葉敏之「不寛容なる王，寛容なる皇帝 オットー朝伝道空間における宗教的寛容」深沢克己・高山博編『信仰と他者 寛容と不寛容のヨーロッパ宗教社会史』（東京大学出版会 2006年）35-72頁。

¹⁰ Richard Fletcher, *The Barbarian Conversion: From Paganism to Christianity*. Berkley 1997; Peter Brown, *The Rise of Western Christendom. Triumph and Diversity, A.D. 200-1000*. 2 ed. Oxford 2003 (1 ed. 1996). ウッドが参照したのは初版であるが、我々は、初版を大幅に増補した二版に拠るべきである。

において重要と思われる知見が組み込まれた上で、宣教に関する標準的な知識を得ることが可能な書物であるが、他方で2001年に、この両書とはまったく異なる観点からの宣教史が出版された。それがここで紹介するイアン・ウッドの『宣教伝。聖人とヨーロッパのキリスト教化、400年から1050年』である。

2. 本書の梗概

内容紹介に入る前に著者について述べておこう。1950年生まれの著者イアン・N・ウッドは、オックスフォード大学のJ・M・ウォーレス＝ヘイドリルのもとで学び、リーズ大学講師を経て、現在同大学教授の地位にある。いまや押しも押されもせぬ初期中世研究の第一人者であり、同時代の先端知を欲する者であれば彼の著作に触れずに済ますことは不可能と言ってよい。本書を除けば、彼の単著は『メロヴィング期の北海』(1983)と表題するスウェーデンで刊行されたブックレット¹¹、『メロヴィング諸王国』(1994)という英米圏では標準的参考文献の地位を得た概説である¹²。ウッドの専門は主として、メロヴィング朝研究、初期ブリテン史、初期中世文化の3つに分かれている。いずれもまだ論文集にまとめられてはいないが、雑誌や論集に寄稿したモノグラフは膨大な数にのぼる。とりわけ近年は、モノとそのコンテクストの関係に對する関心が深まっているようであり、美術史家と協力した研究が刊行されている¹³。

またモノグラフのみならず、初期中世の専門家として、大部の講座にも様々なテーマに関する俯瞰的論考を執筆している。具体例を挙げるならば、『初期中世王権』(1987)には「王、王国、同意」を¹⁴、「オックス

¹¹ Ian N. Wood, *The Merovingian North Sea*. Alingsås 1983.

¹² Ian N. Wood, *The Merovingian Kingdoms 450–751*. Harlow 1994.

¹³ Fred Orton and Ian N. Wood, *Fragments of History: Rethinking the Ruthwell and Bewcastle Monuments*. Manchester 2007. ウッドは以前にも、フランクス・カスケットと呼ばれる聖遺物箱に関わる論文を執筆している。Ian N. Wood, “Ripon, Francia and the Franks Casket in the early middle ages.” *Northern History* 26 (1990), pp. 1–19.

¹⁴ Ian N. Wood, “Kings, kingdoms and consent.” in: P. H. Sawyer & I. N.

フォード版「ヨーロッパ小史」のR・マッキタリック編『初期中世』(2001)には「文化」を¹⁵、A・キャメロン他編『ケンブリッジ版古代史第14巻』(2000)には「北西部諸管区」を¹⁶、P・フォーエイカ編『新ケンブリッジ版中世史第1巻』(2005)には「キリスト教化とキリスト教教育の普及」と「西ヨーロッパの美術と建築、500-700年」を¹⁷、そして程なく上梓されるT・F・X・ノーブルとジュリア・スミス編『ケンブリッジ版キリスト教史第3巻』には「北の辺境：異教と向き合うキリスト教」を寄稿している¹⁸。ウッドのカバーする範囲の広さは彼の学識の深さを体現すると同時に、アカデミアを代表する編者からの信頼の篤さを証明している。

さらに彼の業績は、このような個人的作業にとどまらない。彼は、1993年から98年の5年間、ヨーロッパ学術財団(European Science Foundation)の後援で進められた「ローマ世界の変容(The Transformation of the Roman World)」プロジェクトの責任者の一人であったことも記しておかねばならない。現在14巻を数えるこのプロジェクトの報告集は、古代から中世への移行期に関心を持つ研究者であれば、決して見落としてはならない成果である。第一線級の歴史家のみならず考古学者や美術史家との協力により、ローマ帝国とカロリング帝国という2つの帝国に挟まれて等閑に付されがちであった当該時代の諸側面を明らかとした。

Wood eds. *Early Medieval Kingship*. Leeds 1977, pp. 6-29.

¹⁵ Ian N. Wood, "Culture." in: Rosamond McKitterick ed. *The Early Middle Ages* (Short Oxford History of Europe). Oxford 2001, pp. 167-198.

¹⁶ Ian N. Wood, "The north-western provinces." in: Avril Cameron et al eds. *The Cambridge Ancient History, vol. 14: Late Antiquity: Empire and Successors, A.D. 425-600*. Cambridge 2000, pp. 497-524.

¹⁷ Ian N. Wood, "Christianisation and the dissemination of Christian teaching." in: Paul Fouracre ed. *The New Cambridge Medieval History vol. I, c. 500-c. 700*. Cambridge 2005, pp. 710-734; Ian N. Wood, "Art and architecture of western Empire, 500-700." in: *ibid*, pp. 760-775.

¹⁸ Ian N. Wood, "The Northern frontier: Christianity face to face paganism." in: Thomas F. X. Noble & Julia M. H. Smith eds. *The Cambridge History of Christianity, vol. 3: Early Medieval Christianities, c. 600-c. 1100*. Cambridge 2008, in press.

プログラムの終了後、彼は専門誌と事典にその目的、内容、成果を記録している¹⁹。ウッドの研究組織化の手腕をここに見ることができる。

内容の紹介に移ろう。全体は4部に分かれる。第1部「導入」、第2部「アングロ・サクソン人とその遺産」、第3部「バイエルン人、スラブ人、ザクセン人」、第4部「結論」である。第1部から見ていきたい。第1部はさらに、第1章「ヨーロッパのキリスト教化 400-1000年」(pp.3-24)と第2章「パトリックからベエダへ」(pp.25-53)に分かれる。ウッドはまず、「宣教 mission」と「キリスト教化 Christianisation」の間に線を引くことを喚起する。すなわち本書での定義に従えば、前者は異教徒に対するキリストの教えの伝達であり、後者は、少なくとも表面的にはすでにキリスト教を表明している共同体の内部における信仰深化のプロセスである。本書では当然前者が中心的課題となるが、その際、宣教者が王を改宗させ、王がその臣民を改宗させるという古典的な図式を相対化させることを目指す。それにあたってウッドが採用した手法は、従来の宣教史がそうであったような多面的な歴史プロセスの検討ではなく、宣教師の伝記である聖人伝(hagiography)に限定して、史料学的検討を加えることであった。とりわけ、聖人伝の執筆目的、それらが執筆されたコンテキスト、そしてある聖人伝テキストとその他のテキストとの影響関係が、議論の中心となる。具体的な分析は第2章から始まる。聖パトリックにはじまるメロヴィング期の宣教者へと議論は移るが、この流れにおいて重要であったのは、8世紀前半におけるベエダ『イングランド人の教会史』の成立であった。この大部の書はイングランドにおけるキリスト教化プロセスの記録であるが、従来の聖人伝に描かれた宣教像と異なり、宣教のプロセスに世俗有力者を関連させるという叙述を確立した。これが以下のページで論じられる初期中世の宣教者聖人伝の祖形をなす

¹⁹ Ian N. Wood, "The European Science Foundation's programme on the Transformation of the Roman World and the emergence of early medieval Europe." *Early Medieval Europe* 6 (1997), pp. 219-227; Id., "Transformation of the Roman World." in: *Reallexikon der Germanischen Altertumskunde*, 2 Aufl. vol. 31. Berlin 2005, S. 132-135.

ことになる。

さて、本書の中心は、実際に聖人伝史料を分析した第2部と第3部である。第2部は第3章「ボニファティウス、マインツそしてフルダ」(pp. 57-78)、第4章「アルクインとエヒテルナッハ」(pp.79-99)、第5章「ユトレヒトとミュンスター」(pp.100-122)、第6章「ハンブルクとブレーメン」(pp.123-141)に分かれる。第3部は、第7章「8世紀のザルツブルクとフライジング」(pp.145-167)、第8章「9世紀のザルツブルク」(pp. 168-186)、第9章「ヴァンセスラスのラテン語伝説」(pp.187-206)、第10章「プラハのアダルベルト」(pp.207-225)、第11章は「クヴェアフルトのブルーノ」(pp.226-244)である。この2つの部分は、宣教の歴史をただ時系列的に並べているだけではない。第2部は、フリースラント、ザクセン、スカンディナヴィアへと東漸した北海沿岸部の宣教空間で中心的役割を担った、ウィリブロード、ボニファティウス、アンスガルという3人の聖人伝とその派生伝記を扱う。他方で第3部は、バイエルンから東欧世界へと展開したもう1つの宣教空間を開拓した宣教者の伝記を扱っている。つまりこの一続きの2部が提示するのは、宣教空間の分別であると同時に、その宣教者の行為を記録した聖人伝の系譜論でもあり、すぐれて史料学的な観点から再構成された宣教史ということができる。

いずれの章においても各テキストとそのテキストに関する研究史を踏まえた詳密な分析がなされているが、ここではとくに評者の専門とかわり深い第6章を取り上げて、ウッ드의議論を浮き彫りにしてみたい。聖アンスガルは西フランクシアに801年に生まれ、コルビー修道院で教育を受けた²⁰。815年にルイ敬虔帝が新設したコルヴァイ修道院に移動したアンスガルは、826年ルイの宮廷で洗礼を受けたデーン人の王ハーラル・クラックとともにデンマーク入りをし、829年にはスウェーデンからの使節の招聘により、メーラレン湖上のビルカを踏んだ。彼は850年に再度スウェーデンのビルカに足を運び、865年ブレーメンで死去した。

こうしたアンスガルの生涯を記録したのは、彼の同僚であり後継者で

²⁰ アンスガルの生涯は、H. Wolfdieter, “*Foris apostolus - intus monachus. Ansgar als Mönch und ‘Apostel des Nordens’.*” *Journal of Medieval History* 11 (1985), pp. 1-30.

あったリンベルトである²¹。ウッドは、このリンベルトが著した『アンスガル伝』を、従来の聖人伝研究とは異なる視角から読み解こうとする。1つは、『アンスガル伝』を法的文書として理解する点である。スカンディナヴィアへの宣教ばかりが話題となるアンスガルは、831年に初代ハンブルク司教となった。つまり、彼は宣教者であると同時に、司教区の代表者であった。しかしながらスカンディナヴィアを眼と鼻の先に控えていたハンブルクは、845年にヴァイキングによる略奪を受け、司教座としての機能を停止する²²。その代償としてアンスガルは847年に空位であったブレーメン司教に任じられ、その結果ハンブルク＝ブレーメン大司教座が成立した。この合併は利害の対立するケルン大司教座から強い非難を受けたが、864年に教皇ニコラウス1世がアンスガルに有利な裁定をすることで収まった。ウッドは、『アンスガル伝』はこの教皇の裁定をひろく周知させる、法的役割を担っていたとする。2つ目は、『アンスガル伝』の構成から、同時代のメンタリティを読み取ろうとする点である。聖人伝は、顕彰する対象の生涯をただ綴っているだけではない。『アンスガル伝』の場合、そのなかにヴィジョンと奇跡という要素を組み込んでいる。従来の聖人伝研究では、これを個別的価値を欠いたトポスと見なし、深く追求することはなかったが、ウッドは、リンベルトによる読者／聴衆を意識した戦略的挿入であると理解する。3つ目は、アンスガル伝系の聖人伝をひとつのクラスタと見做し、北海沿岸で生成した宣教聖人伝グループの流れのなかに位置づけようとする点である。前章でフリースラント宣教のウィリブロード系クラスタとザクセン宣教のボンファティウス系クラスタの詳細な系譜関係とそのコンテキストによる機能の差異が明らかとされたが、本章では初代ブレーメン司教を対象とし

²¹ 『アンスガル伝』のテキストは、“Rimbert, Vita Anskarii.” in: W. Trillmich & R. Buchner hrsg. *Quellen des 9. und 11. Jahrhunderts zur Geschichte der hamburgischen Kirche und des Reiches* (Ausgewählte Quellen zur deutschen Geschichte des Mittelalters XI). Darmstadt 2000 (1961), S. 3-113.

²² ハンブルク＝ブレーメン司教座の成立に関してはさしあたり、W. See-grün, “Hamburg-Bremen.” in: *Lexikon des Mittelalters* IV (1999), col 1885-1889.

たアンスガルによる『ヴィレハッド伝』、そして『リンベルト伝』をひとつのクラスタとして、理解しようとする。いずれも、『アンスガル伝』を、ある歴史コンテキストの中で生成された個別的な存在と見なすことによって導き出された観点である²³。

なお内容紹介という目的から逸するが、ここで一点コメントしておきたい。スカンディナヴィアへの宣教はこれ以降も連綿と続いているにもかかわらず、上記クラスタに連なる聖人伝が執筆された痕跡はない²⁴。11世紀の後半にブレーメンのアダムが『ハンブルク司教事績録』を著すまで、スカンディナヴィアの情報はラテン語によってほとんど記録されておらず、それが初期スカンディナヴィア史の再現を困難としている。それではなにゆえこの2世紀間、聖人伝が執筆されなかったのだろうか。ハンブルク大司教ウンニのように、スカンディナヴィア世界へ実際に足を運んだ人物もいたし²⁵、デンマークに司教座が確立される過程において、少なからぬドイツ人が司教として送り込まれたにもかかわらずである²⁶。このスカンディナヴィア宣教に関与する聖人伝空白の時代は、ザク

²³ 近年、ウッズの議論をさらに進展させる論文もあらわれた。James M. Palmer, “Rimbert’s *Vita Anskarii* and Scandinavian mission in the ninth century.” *The Journal of Ecclesiastical History* 55 (2004), pp. 235-256.

²⁴ 当該地域の聖人伝の一覧は、T. Klüppel, “Germania (750-950).” in: Guy Philippart ed. *Hagiographies: histoire internationale de la littérature hagiographique latine et vernaculaire en Occident des origines à 1550*, vol. 2 (Corpus Christianorum). Turnhout 1996, pp. 161-209.

²⁵ ウンニについての簡潔な説明は Stefan Weinfurter & Odilo Engels eds. *Series episcoporum ecclesiae catholicae occidentalis ad initio usque ad annum MCXCVIII, Vol. V-II: Archiepiscopatus Hammaburgensis sive Bremensis*. Stuttgart 1984, p. 21.

²⁶ 1198年までのデンマークの司教一覧は、Helmuth Kluge ed. *Series episcoporum ecclesiae catholicae occidentalis ad initio usque ad annum MCXCVIII, Vol. IV-II: Archiepiscopatus Lundensis*. Stuttgart 1992. ただし、この一覧の執筆者の一人の手になる次の論文も参照されるべきである。Michael H. Gelting, “Elusive bishops: remembering, forgetting, and remaking the history of the early Danish church.” in: Sean Gilsdorf ed. *The Bishop: Power and Piety at the First Millennium*. Münster 2004, pp. 169-200.

センにおけるオットー朝の勃興と無縁ではないと思われるが、まだ説得的な解答の得られていない問いである。

第4部すなわち第12章は全体の結論部であり、「宣教、『親密』そして『他者』」(pp.247-271)である。ここでは第2部と第3部で個別に分析してきた聖人伝の構造と機能をまとめている。ここで重要と思われるのは、聖人伝をひとつの史料類型として見なすべきではないという点である。一口に聖人伝といっても、その成立プロセスは決して同一ではない。聖人伝とは、ある聖人にまつわる様々な情報の集成であり、作成された目的も聴衆も聖人伝ごとに異なる。したがって、その取り扱いも、作成されたコンテクストに配慮したものでなければならないというのが、初期中世における宣教聖人伝を通覧した結果得られたウッドの見解である。かつては想像とトポスの産物として退けられていた聖人伝の見直しが求められているようである。

3. 本書の意義

ここで本書の宣教研究における意義を3点挙げておきたい。1つ目は、宣教史を歴史学的に論じた点である。この点は、ウッドがことあるごとに立ち返るフレッチャーとブラウンの著作と同じであり、本書でもまた、教会史ではなく一般史の一部としての宣教史が描き出されている。宣教は初期中世世界を論じるにあたって、決して除外することのできない側面であり、それは他方で宣教という行為が、西ローマ帝国解体後の新しい政治システムの成立と切り離せないことをも意味する。2つ目は、聖人伝という史料類型が、それが生み出された社会の中で持っていた機能を再現した点である。本書での聖人伝の分析は、聖人伝の文献学的調査ではなく、そのコンテクストを埋める作業に等しいが、それはウッドのもつ一般史の知識によって十分に再現されている。その詳細は、すでに『アンスガル伝』を扱った章を事例として、上述したとおりである。3つ目は、初期中世という時代の空間的特性を、宣教という視点から逆照射した点である。宣教の対象は異教圏、つまりキリスト教世界にとって他者圏である。ヨーロッパ半島の大部分がキリスト教化されるのは、まさに本書の叙述が終えられる11世紀であり、そうであるとするならば、ポ

スト・ローマ期から初期中世にかけてのヨーロッパ史は、キリスト教化のプロセスであると見做すことも可能である。とりわけ宣教は、フランク帝国とドイツ帝国という2つの帝国の教会システムに組み込まれた制度であり、宣教聖人伝は特殊初期中世的空間でしか生み出されえない史料類型であったとすることができる。事実これ以降の聖人伝は、以前とは異なり対象とする聖人の奇跡を強調するようになるとウッドも指摘している。

一見すると概説的に見える本書であるが、初期中世の聖人伝を精査した上で以上3つの新機軸を前面に押し出している点を考慮するならば、立派なモノグラフと言える。実はウッドはすでに、初期中世における宣教史の概観を刊行していた。それは日本語で読むことのできる唯一のウッドの文章でもある²⁷。この短い概観は、あくまで歴史的事象の通覧であり、『宣教伝』のように、史料学的観点からの初期中世史への独自の貢献というわけではない。そういった意味では、この概観と『宣教生活』の間の20年は、歴史家ウッドを大きく成長させた期間であったと言ってよいかもしれない。もちろんこの間に、大陸とイングランドの宣教と聖人伝に関する数多くの個別論文を刊行していたことも忘れてはならない²⁸。ウッドが序文で述べているように、本書は、フレッチャーとブラウンの著作を下敷きにはしている。しかしながら、両者よりも王権の戦略性と聖人伝の機能性に注目するウッドの描き出した宣教史は、今後も当該研究分野において独自の位置を占めるだろう。

しかしながら、この分野の研究は、実のところヨーロッパ規模で進展

²⁷ Ian N. Wood, "The conversion of the barbarian peoples." in: G. Barraclough ed. *The Christian World*. London 1981, pp. 85-98 (別宮貞徳監訳『図説キリスト教文化史1』原書房 1993年、「第3章 蛮族の改宗」, 185-221頁)。

²⁸ 代表的な論文として、Ian N. Wood, "The *Vita Columbani* and Merovingian hagiography." *Peritia* 1 (1982), pp. 63-80; Id. "Saint-Wandrille and its hagiography." in: Ian N. Wood and G. A. Loud eds. *Church and Chronicle in the Middle Ages*. London 1991, pp. 1-14; Id. "The mission of Augustine of Canterbury to the English." *Speculum* 69 (1994), pp. 1-17; Id. "The use and abuse of Latin hagiography." in: E. Chrysos and Ian N. Wood eds. *East and West: Modes of Communication*. Leiden 1999, pp. 93-109.

しているように見える。本書とは異なるスタンスに立つ2冊の研究書を挙げておきたい。1冊は、ルッツ・フォン・パドベルクの『信仰対決の演出。初期中世における宣教説教の理論と実践』(2003)である²⁹。ドイツ語圏では、ハルナック以来の教会史の枠組みでの宣教史が、神学との関連において深化する一方で、本来ゲルマニアという異邦人の地であったこともあり、ゲルマン学の関心とも不可分である。ボニファティウス研究で博士号を取得したフォン・パドベルクは、多神教のゲルマン諸族に一神教のキリストの教えを浸透させるために、宣教者がどのような道具立てを用いたのかに焦点を当て、ゲルマン信仰とキリスト教の相克を解説しようとする。もう1冊は、1976年生まれの若き歴史家ブルーノ・デュメジルの『ヨーロッパのキリスト教的根源。5世紀から8世紀の蛮族諸王国にける改宗と自由』(2005)である³⁰。デュメジルは、場合によっては「寛容」と置き換えることすらできる「自由」という概念を中心に据え、民族移動期における改宗プロセスを追及する。ただし、いずれもウッドの著作のような史料分析というよりは、現象分析である。

いずれにせよ、初期中世のキリスト教化をめぐる俯瞰的知識と論点は、いったん我々に与えられた。今後、宣教空間に関心を持つ歴史家は、個別事例の研究を進めていくべきであろう。

²⁹ Lutz von Padberg, *Die Inszenierung religiöser Konfrontationen: Theorie und Praxis der Missionspredigt im frühen Mittelalter*. Stuttgart 2003.

³⁰ Bruno Dumézil, *Les racines chrétiennes de l'Europe. Conversion et liberté dans les royaumes barbares V^e-VIII^e siècle*. Paris 2005.